

大雪の峰々を覆う白銀にも、春の訪れを感じる今日この頃です。

大雪山の麓旭川の地にて、北海道で初めて「銘木市」が開催されてから丁度50年、半世紀を迎えまして開催数も400回を超えるに至りました。同時に主催者である「旭川林産協同組合」が創立75周年を迎え、あわせた記念式と祝賀会を開催させていただきました。

日頃お世話になっております全国のお客様、全道出品者様、更に地元議員、関係官庁、諸団体の皆様のご臨席を戴き、組合員・銘木実行委員が一堂に会して、銘木市開催50周年、旭川林産組合創立75周年をお祝いできますことは最も喜びとするところであり、厚くお礼申し上げます。

3月31日開催の平成28年度の最終手仕舞市は、この50年間で開催数404回となり、累計売上数量116万m³、合計売上金額960億円にならんとしております。

北海道の木材界で半世紀も続いている共同事業は他に無いと存じます。この事業が継続できたのは、合理的な経営と売り手買い手両者にとって公平で公開された運営によるものだと思います。

全て市売実行委員会の合議制によって出品ルールが決められ、出品材は厳格な寸面を打ち、木口を揃え、現物熟覧できるロットにして公開入札します。買い決済は現金または銀行保証手形にしてもらう。このルールの上で木材のプロとプロが憂いなく真剣勝負できる場所を作り上げたのです。

長い経験により木の見立てが養われました。原木担当者は常に銘木市への出品を考え、立木調査の時も、素材公売の時も、流通材の中に付け目の木があるかを判断しています。また銘木を求めて勇猛果敢にロシア、アメリカ、欧州に海外出張をしています。

買い方のお客様は殆ど常連のお客様です。玉の多寡に拘わらず、真夏を除いてオールシーズン旭川に来て材を見てくれます。毎回、定宿に泊まり馴染みの店で食事や地酒を楽しみつつ、冬の吹雪やシバレの

中で真剣に検品する姿を見るに、本当に木を愛し、木材のプロ中のプロばかり、改めて敬意を表し心から感謝する次第であります。

50年前、銘木市をはじめるとに当たって、旭川原産地の立場と既得権を主張する本州市場との衝突もありましたが、『北海道広葉樹の復権を目指す』という大義により、英断し実行致した訳です。その後幾多の苦難を乗り越え、50年間継続出来ました。今では銘木ばかりでなく、並材、原料材が多く、地元の製材工場へ供給源として重要な役割を果たしております。これは産地・消費地ともに非常に良い結果であったと言えます。

現在、北海道の資源背景、収穫量の減少、そして海外資源ナショナリズムにより出品量は減り、品質も並材が多く、北海道産材90%の市であります。本州のお客様も、地元の木材製造業者も品質に合わせ、加工技術を革新され、貴重な広葉樹を上手く使うようになりました。今後も更なる小径木の利用を図っていく所存であります。

温帯広葉樹は世界の銘木です。色と目合の美しさ、木質の優しさは他に勝るものではありません。これからも銘木実行委員は北海道全域から、そして海外からも銘木を集め、皆様の前に取り揃えますので、引き続きお買い上げご支援をお願い致します。

旭川林産協同組合は設立75年を迎えました。昭和17年大東亜戦争の中、不足する造材物資の調達と戦時木材の割当の円滑化を目的に、初代理事長・松井耕造の下に設立されました。苦労と変遷の時を経て、昭和42年4代目理事長・高橋丑太郎が中核事業銘木市を開設し、それが成功によって現在の林業会館、2つの倉庫、2つの展示場など自前の資産を持つ堅牢な組合を形成することができました。正に組合員の努力、お客様のお引き立て、国有林、道有林の支援の賜物と存じます。

組合は、植林・間伐をする造林・造材業者から針葉樹製材工場、広葉樹製材工場、合板、集成材、プレカットなどの製造業者、王子、日本製紙の製紙会社、流通商社で構成されており、更にこれを原料にしたブランド品旭川家具が確立しています。

北海道林産試験場や北方総合住宅研究所などの研究機関があります。そして国有林、道有林、大学演習林、民有林が自然を守り、合法的に森林管理をしております。つまり大雪山の麓に一大木材産地産業が形成されているのです。

この産地産業形成ゆえに突板銘木から建具材、家具材、一般製材、フロア原板、集成原板、暖炉のマキ、敷き藁、暗渠、パルプ、バイオマスまで、所謂カスケード利用が確立されているのです。

これからも最北北海道にいる私ども組合員の努力と結集によって、持続的山林経営と貴重な木材の有効利用を図って行く所存でございます。皆様方の暖かいご支援とご指導をお願い致します。

平成29年3月29日
旭川林産協同組合
理事長 高橋秀樹